

博士論文要約

論文題目

精神科スーパー救急病棟における患者の希望を反映した看護実践に関する研究

Nursing practices that reflect patients' hopes
in psychiatric super emergency wards

岐阜県立看護大学大学院

学籍番号 1217002

桐山 啓一郎

KIRIYAMA Keiichiro

第1章 研究全体の構造

I. 研究の背景

精神疾患は、精神症状が変化して増悪と回復を繰り返す疾患の側面と、精神症状を完全には取り除けず、慢性的に生活のしづらさを有し続けるという障害の側面の2側面が混在する特徴を有する。精神科スーパー救急病棟は、精神症状の急性増悪があった時のみ短期的に入院治療を行い、早期退院を目指すことで、疾病の側面に対応し、障害の側面については地域で支援する機能を有している。精神科スーパー救急病棟の機能は疾病と障害の両側面を有する当事者の地域生活支援に欠かせない。

急性期に対応する精神科病棟では、急性期の精神症状が落ち着いた後、看護職者が対象者にかかわらなくなることが指摘されていた(中沢, 2005)。筆者の研修先の精神科スーパー救急病棟でも急性期の精神症状が落ち着いた後、看護師の対象者へのかかわり頻度の減少を認めていた。研修先に入院中の患者らは、退院後の希望について看護師に聞いて欲しいというニーズを表出していた。看護師側も急性期の病状が落ち着いた後十分にかかわれていないという認識していた。

以上より、患者の退院に関する希望を反映した支援を提供できていないことは看護実践上の問題と考えられた。精神科スーパー救急病棟入院中の患者が看護師に求めたい支援として説明と個別対応があり、「看護師に話を聞いてもらえることができれば興奮しなかった」などの思いを抱いていた(松下, 2019)。精神科スーパー救急病棟に入院している患者は、看護職者に個別に対応されることで看護への満足度をより強めることができるのではないかと考えられた。

II. 研究目的

精神科スーパー救急病棟において患者の希望を看護師が把握し、その希望を反映した看護実践を通して、患者の希望に基づく看護のあり方を探求する。

本研究において、患者の希望を、「患者が将来実現したいと期待する自らの姿」と定義する。Russinova(1999)は、希望を「未来に向けたゴール達成の期待であり、将来可能になる

という感覚につながる行動志向的な動機づけの力」であると定義している。川田ら(2018)は患者の希望を引き出す精神科看護師の援助実践に関する研究で、前述の Russinova の文献を引用しつつ「将来に目標が達成されるという期待と、行動を動機づける力の総合的な認知であり、その本質や発言が対人関係のプロセスにあるもの」と定義している。Russinova や川田らの先行研究を参考にすると希望とは将来的な志向であり、自分はこのように生きたい、という期待であると言える。

Ⅲ. 研究の全体的構成

本研究は3つの研究から成り立つ。

研究1は研修先以外の精神科スーパー救急病棟において実践されている患者の希望を反映した看護実践を看護師への半構造化面接調査から明らかにした。研究2は、研修先の精神科スーパー救急病棟に入院する患者に半構造化面接調査を実施し、入院中に看護師から受けた自分の希望を反映した看護実践、さらに看護師に求めることを看護の利用者の視点から明らかにした。研究3は、研究1と研究2を踏まえて、研修先である精神科スーパー救急病棟において、患者の希望を反映した看護を実践し、患者側と看護師側から評価した。

Ⅳ. 倫理的配慮

研究協力者に、研究の目的、方法、協力してもらう内容、研究への参加・不参加・途中辞退における自由意思の保証、個人情報保護、データの取り扱い、研究結果の公表方法について文書と口頭で説明し、同意を得た。本研究は岐阜県立看護大学大学院看護学研究科論文倫理審査部会の承認を得た後に実施した。承認番号は30-A001D-2、承認年月は平成30(2019)年5月であった。

第2章 研究1

Ⅰ. 研究目的

精神科スーパー救急病棟で実践されている患者の希望を反映した看護実践を明らかにする。

Ⅱ. 研究方法

患者の主体性や自律を尊重する看護を展開している精神科スーパー救急病棟に3年以上勤務している看護師を対象にインタビューガイドを用いて半構造化面接調査を実施した。面接内容は対象者の許可を得て録音し、逐語録を作成した。作成した対象者ごとの逐語録を意味内容の文脈に沿って分割した。その後、分割した文脈を抽出した。抽出した文脈を精読の上、要約した。類似した要約をまとめ、まとまりごとにその内容を抽象化した上で象徴する名前を付け、対象者ごとのサブカテゴリを生成した。その後、対象者ごとのサブカテゴリを、類似性に応じて集めた。そして、類似性に合わせた集団ごとに、その集団を象徴する名前を付け、カテゴリを生成した。

Ⅲ. 結果

3名の対象者に半構造化面接調査を実施し、39 サブカテゴリ、10 カテゴリを生成した。対象者3名の平均看護師経験年数は14.7年、平均精神科経験年数は11.0年、平均精神科

スーパー救急病棟経験年数は 5.2 年であった。

生成したカテゴリは、【患者の希望を尊重しようとするきっかけ】、【患者の病状や疎通性をアセスメントして隔離中などできるだけ早期に希望を尋ねられるかの見極め】、【患者との関係性を基盤に希望を尋ねる】、【患者が希望を表現しやすいように今の段階でしたいことや過去の経験を具体的に尋ねる】、【患者の希望は退院した直後についての内容】、【患者の希望を最優先し段階的に支援】、【患者の希望を尋ねることで悪いところに眼が行く看護師の悪い癖の気づき】、【チームで患者の希望を尋ね実現するための風土醸成の必要性】、【入院期間の過剰な意識】、【患者の希望を反映した看護を実践した事例】であった。

第 3 章 研究 2

I. 研究目的

精神科スーパー救急病棟入院中の患者が看護師に自分の希望を確認され看護に反映されたという体験を有しているか、さらに看護師に望むことは何かを明らかにする。

II. 研究方法

研修先の精神科スーパー救急病棟に入院中で退院が決定している患者を対象にインタビューガイドを用いて半構造化面接調査を実施した。面接内容は対象者の許可を得て録音し、逐語録を作成した。作成した対象者ごとの逐語録を意味内容の文脈に沿って分割した。その後、分割した文脈を抽出した。抽出した文脈を精読の上、要約した。類似した要約をまとめ、まとまりごとにその内容を抽象化した上で象徴する名前を付け、対象者ごとのサブカテゴリを生成した。その後、対象者ごとのサブカテゴリを、類似性に応じて集めた。そして、類似性に合わせた集団ごとに、その集団を象徴する名前を付け、カテゴリを生成した。

III. 結果

10 名の対象者に半構造化面接調査を実施し、67 サブカテゴリ、14 カテゴリを生成した。対象者 10 名の平均精神科入院回数は 3.2 回、平均精神科スーパー救急病棟入院回数は 1.9 回、今回の入院における面接日までの平均入院日数は 53.3 日であった。

生成したカテゴリは、【看護師に希望を伝えられた】、【看護師が向き合ってくれたことを嬉しく感じた】、【看護師に希望を伝えて実施された入院中の日常生活支援】、【看護師にタイムリーに対応してもらえた】、【入院中に精神症状について対応された】、【看護師に希望を伝える場面があまりなかった】、【看護師はもっと患者の話を聞いたほうが良い】、【多忙な看護師への遠慮や看護師では何ともできないという思いから希望を伝えなかった】、【看護師は自分に対応してくれないと思っている】、【看護師により希望を把握し実現する力に差がある】、【入院生活に細やかな配慮をして欲しい】、【退院後の希望について看護師に伝えたい】、【入院中に今後の見通しを尋ねたかった】、【完治しない病状について相談したかった】であった。

第 4 章 研究 3

I. 研究目的

精神科スーパー救急病棟における患者の希望を反映した看護を実践しその過程と患者側、

看護師側双方の評価を明らかにする。

II. 研究方法

1. 患者の希望を反映した看護実践方法の考案と実践

精神科スーパー救急病棟の看護師長と副主任をコアメンバーとし、研究 1 及び研究 2 の結果を踏まえて患者の希望を反映した看護実践方法を考案した。その後、精神科スーパー救急病棟に所属する看護師から入院患者に看護実践方法に基づき、看護を実践してもらった。看護実践後、再度コアメンバーで看護実践方法を検討してもらい、より患者の希望を反映するための方法に更新した。更新した看護実践方法は、看護師から患者に実践してもらった。実践後、コアメンバーで検討し、再度更新した。データ収集中は実践と更新を繰り返した。看護実践方法考案過程と看護実践は経時的に記録した。

2. 患者の希望を反映した看護実践の評価

看護実践方法を基に看護を実践された患者に、インタビューガイドに基づく半構造化面接調査を実施し、看護実践を評価してもらった。また、看護実践を終了した看護師と、看護実践方法を考案し、病棟看護管理者として経過を観察していたコアメンバーにもインタビューガイドに基づく半構造化面接調査を実施し、看護実践を評価してもらった。患者、看護師、コアメンバーへの面接内容は対象者の許可を得て録音し、逐語録を作成した。作成した対象者ごとの逐語録を意味内容の文脈に沿って分割した。その後、分割した文脈を抽出した。抽出した文脈を精読の上、要約した。類似した要約をまとめ、まとまりごとにその内容を抽象化した上で象徴する名前を付け、対象者ごとのサブカテゴリを生成した。その後、対象者ごとのサブカテゴリを、患者、看護師、コアメンバーごとに類似性に応じて集めた。そして、類似性に合わせた集団ごとに、その集団を象徴する名前を付け、患者、看護師、コアメンバーごとのカテゴリを生成した。

III. 結果

1. 患者の希望を反映した看護実践方法の考案と看護実践の内容

1) 考案された看護実践方法

研究 2 の結果を基に、コアメンバーが看護実践上の課題を検討した。コアメンバーは患者から希望を聞くことを看護師の業務ではないと認識する看護師の存在を指摘し、現状を変えたいと考えていた。検討では、看護師が患者の希望を確認することの重要性を確認した。確認後、研究 1 の結果を参考に、患者の希望を反映した看護実践方法を考案し、実践する精神科スーパー救急病棟の看護師に確認してもらった上で、実践した。研究 1 及び研究 2 から、患者の希望を退院後の生活に関連した内容に焦点化した。看護実践方法は 4 回更新(看護実践方法バージョン 1～バージョン 5)した。なお、データ収集中に看護師長の交代があった。

(1) 看護実践方法バージョン 1

看護実践方法バージョン 1 は 3 名の患者に実践された。考案にあたり、コアメンバーは看護実践の第 1 段階として、個別の看護師に患者の希望を反映した看護を実践してもらい

たいと検討した。看護実践方法バージョン1の内容は、①受持ち患者若しくは一定の関係がある対象者に実践する、②日常の勤務中に対象となる看護師が独自にやりくりし、対象者の下に出向き希望を聞く、③対象者の希望は今後の見通しや退院後の生活に関する内容が考えられるため、患者に希望を尋ねる際、看護師側から退院後の希望を意識する、④実践内容は看護記録に患者の希望を把握した状況がわかるように記録する、⑤患者の希望を把握した後、どのように看護に反映し実現するかは看護師に一任する、であった。

(2) 看護実践方法バージョン2

看護実践方法バージョン2は3名の患者に実践された。看護実践方法更新にあたり、コアメンバーは、看護実践方法バージョン1をチームでの看護実践に発展させたいと話合った。看護実践方法バージョン2の内容は、①チーム毎に病状が落ち着いた患者を選定して共有する、②選定した患者の受持ち看護師が退院後の生活について希望を聞く時間をチームで作る、③受持ち看護師が日勤帯で患者から希望を確認する、④受持ち看護師で患者の希望の実現を支援できる場合は実践する。単独で希望の実現が難しい場合は、チームでのカンファレンスで検討する、⑤カンファレンス後、検討結果を基に看護実践する、であった。

(3) 看護実践方法バージョン3

看護実践方法バージョン3は2名の患者に実践された。看護実践方法更新にあたり、看護実践方法バージョン2を振り返ったコアメンバーは、チームでの取り組みが時期尚早であったことを共有した。共有後、様々なキャリア段階にある看護師に、患者の希望を反映した看護実践を経験してもらい、最終的にチーム全体で看護実践を目指すことを話合った。そして、まず新規入職の看護師を対象とした。看護実践方法バージョン3の内容は、①今年度入職の看護師が受持ち患者に実践する、②勤務中に対象となる看護師が独自にやりくりし、対象者の下に出向き希望を聞く、③対象者の希望は退院後の生活に関する内容が考えられるため、希望を尋ねる際、看護師側が退院後の希望を意識する、④看護記録は本実践に合わせて特別に記載しない、⑤患者の希望を把握した後、看護師が希望を実現するために看護を実践する。必要に応じてコアメンバー若しくは筆者が相談に乗る、であった。

(4) 看護実践方法バージョン4

看護実践方法バージョン4は1名の患者に実践された。看護実践方法更新にあたりコアメンバーは、新規入職者に続いて、移動後間もない看護師を対象とすることを話合った。看護実践方法バージョン4の内容は、①移動後間もない看護師が受持ち患者に実践する、②日常の勤務中に対象となる看護師が独自にやりくりし、対象者の下に出向き希望を聞く、③対象者の希望は今後の見通しや退院後の生活に関する内容が考えられるため、患者に希望を尋ねる際、看護師側から退院後の希望を意識する、④看護記録は本実践に合わせて特別に記載しない、⑤患者の希望を把握した後、看護師が希望を実現するために実践する。必要に応じてコアメンバーである副主任が実践中の相談に乗る、であった。

(5) 看護実践方法バージョン5

看護実践方法バージョン5は2名の患者に実践された。看護実践方法更新にあたりコア

メンバーは、これまでの全ての看護実践方法を振り返り、患者の希望を反映した看護実践に必要な要素を抽出した。看護実践方法バージョン5の内容は、①面接を途中で中断しないためにチーム内で調整する、②日々のかかわりや現病歴等から面接すべきタイミングや希望の傾向を把握する③出勤日はあいさつしたり、気にかけていること伝え、事前に面接を調整する④急性期でもできる限り早期から退院に関する希望を尋ねてみる⑤対象者の希望を対象者自身が実現できるように迅速に調整などを行う。目標が大きすぎてすぐに実現が難しい場合は、下位の目標を設定して看護に反映する、であった。

2) 看護実践の経過

看護実践方法バージョン5を実践されたA氏と、実践したB看護師の経過を示す。なお、文中の数字(①～⑤)は、看護実践方法バージョン5の内容を示す。

B看護師は、リーダー業務や看護学生への実習指導を行いつつ、病棟看護師の繁忙度が下がる午前中の検温終了後から昼食までの時間や、午後からの時間を見計らいA氏の下を訪れた(①)。A氏は入院時に躁状態を示し、その後抑うつ的となっていた。A氏は入院時から不安が強く、主治医への恐怖を理由に診察を拒んだ。B看護師は、A氏の安定しない病状から、希望を表現する余裕がないと判断した(②)。B看護師は折にふれて保護的かつ肯定的な声をかけつつ観察を継続した(③)。B看護師はA氏が他の入院患者と談笑する姿を確認した頃に希望を尋ねた(④)。A氏は、希望は特にない、ここ(病院)に居たい、と答えた。B看護師は病状として希望を十分に表現(言語化)できない可能性を考慮し、退院後の希望よりも、安全の欲求を優先するようにかかわった(⑤)。結果、A氏はB看護師と廊下ですれ違う際などに、あなたを見るとホッとすると発言するようになった。データ収集期間の終了に伴い、A氏への看護実践の経過は記録を終了したものの、評価のための半構造化面接調査では、現在の収入を維持し、自宅での単身生活を継続したいという希望を表出した。また、A氏はその希望を直接B看護師に伝えようと思っていることも表出した。

2. 患者の希望を反映した看護実践の評価

1) 患者からの評価

看護実践した患者11名のうち6名に半構造化面接調査を実施し、46サブカテゴリ、8カテゴリを生成した。生成したカテゴリは、【看護師から話しやすい環境を提供された】、【看護師のかかわりから得た安心】、【退院後の生活への希望】、【看護師の援助に希望を反映された】、【看護師以外の職員への要望】、【今回の入院への満足】、【看護師に対応されなかった】、【継続する不安や不満】であった。

2) 看護師からの評価

看護実践した看護師6名のうち5名に半構造化面接調査を実施し、74サブカテゴリ、17カテゴリを生成した。さらに生成したカテゴリを“看護師自身の変化”、“対象者の希望を把握するための工夫”、“対象者の変化”、“実践後の課題”の4つの大カテゴリに分類した。生成したカテゴリは、“看護師自身の変化”が【看護師の想像する希望と患者さんの表出する希望の違いを発見】、【実践前よりも患者さんの希望を聞きたくなった】の2カテゴリであ

った。“対象者の希望を把握するための工夫”が【看護師の忙しさを気遣い遠慮する患者さんの下に出向く】、【次の勤務日を伝えるなど患者さんが言いたいことを言えるような些細なかかわり】、【患者さんの症状や行動をアセスメントした上での希望の把握】、【患者さんの気分に配慮した希望の聴取】、【患者さんと看護師が互いに必要とする関係性を活用】、【患者さんの話を聞き洩らさない】、【患者さんが希望を話しやすいための問いかけ方、場所、位置】、【従来の方法ではなく実践方法に基づき入院早期から希望を確認】、【患者さんとの面接時間を確保するためのチーム内での実践の共有と調整】、【患者さんの抱く退院後の生活に関連した希望を見通す】、【入院中から退院後を視野に入れる】、【患者さん主体の希望実現】の12カテゴリであった。“対象者の変化”が【実践中に捉えた患者さんの変化】の1カテゴリであった。“実践後の課題”が【慢性期の患者さんへの実践方法の不一致】、【チームで統一したかかわりへの未到達】の2カテゴリであった。

3) コアメンバーからの評価

コアメンバー3名に半構造化面接調査を実施し、31 サブカテゴリ、11 カテゴリを生成した。生成したカテゴリは、【管理者の看護観と看護実践方法の合致】、【退院後の希望に焦点化したことによる有効性】、【看護師が患者さんの声を聞く効果を認識】、【患者さんの希望を聞くことを看護師の役割と認識】、【看護師が患者さんの大事に思う希望に踏み込めた】、【患者さんが看護師とかかわりたいと表出するように変化】、【患者さんの変化を受けて看護師が精神科の醍醐味をわかった】、【受持ち看護師によるチームへの肯定的な影響】、【受持ち患者さんの希望を反映した退院支援の連携】、【さらに患者さんの希望を聞く必要性】、【チームで患者の希望を反映する看護の未統一】であった。

第5章 研究全体の考察

I. 精神科スーパー救急病棟入院中の患者が抱く希望

研究1、研究2で患者が表出し、看護師が把握した患者の希望は、退院後の生活に関連していた。そのため、研究3の看護実践では、精神科スーパー救急病棟入院中の患者の希望を退院後の生活に関する希望に焦点化していた。結果、患者らは一定の満足を表出していた。患者らは入院前まで知己生活を営み、精神科病棟の中でも著しく平均在院日数の短い病棟に入院していたため、共通して退院後の生活について希望を有していたと考えられた。精神科スーパー救急病棟入院中の患者らは入院前まで自分の力で営み、築いてきた生活に戻りたいと希望していた。患者から表出された希望は、日常である普通の生活や社会生活としての仕事を継続したいというものであり、その人らしさを表していると考えられた。つまり、患者らは自分らしく生活したいと希望していた。

【看護師に対応されなかった】や【継続する不安や不満】といった対象者らの語りからは、自分らしく生きたいという希望を有しつつも、入院中、看護師に表出できずにいる可能性を推察できた。本研究で明らかになった対象者の希望から、対象者は自分らしく生きたくとも、自力で実現することができず、看護師にも支援を求められないという苦悩を有していたことも考察できた。

Ⅱ．精神科スーパー救急病棟における患者の希望把握

研究 3 で看護師らが【看護師の想像する希望と患者さんの表出する希望の違いを発見】したことを述べていた。精神科急性期病棟では、急性期の精神症状が落ち着いた後、看護師が患者に十分かわかっていないことが指摘されていた(中沢, 2005)。本研究で焦点化した退院後の生活に関する希望は、研究 3 の A 氏のように急性期の精神症状を脱した後、表出されていた。看護師は急性期の精神症状が落ち着いた後、かわかる頻度が減少するために患者の希望を把握していない可能性もあった。精神科スーパー救急病棟における当事者の主体性を尊重した看護実践のためには、看護職者の認識する患者の希望は異なることを認識し、症状の鎮静化に焦点化しすぎず、まず患者の希望に耳を傾けて看護を実践する必要があると考えられた。

Ⅲ．看護実践前後における看護の対象者からの評価の変化

それぞれ対象者は異なるものの、看護実践方法を実践する前の研究 2 の結果と、看護実践後の研究 3 の患者のカテゴリを比較し、看護実践の変化を考察した。研究 2 で患者らは【看護師はもっと患者の話を聞いたほうが良い】と述べていたが、研究 3 では【看護師から話しやすい環境を提供された】ことが語られていた。そして、研究 2 で患者らは【退院後の希望について看護師に伝えたい】と述べていたが、研究 3 では【退院後の生活への希望】を看護師に伝えていた。さらに、研究 3 では【看護師の援助に希望を反映された】とも語られていた。看護実践方法により、看護師が患者の話に耳を傾けた結果、患者が退院後の生活への希望を表出し、その希望に基づく看護が実践されたと考えられた。

Ⅳ．精神科スーパー救急病棟における患者の希望を反映した看護実践のあり方

研究 3 の看護実践方法では、B 看護師に代表されるように看護師が患者の希望を把握できるよう時間を作ったり、細やかに声をかけたりして実践していた。実践を受けた患者らは【看護師から話しやすい環境を提供された】と述べていた。看護師も【患者さんと看護師が互いに必要とする関係性を活用】と表現していた。患者が希望を表出するためには、精神科スーパー救急病棟という平均在院日数の制限がある中であっても、まず、患者-看護師の関係性を構築する必要があると考えられた。

次いで、平均在院日数の制限がある中で、研究 3 看護実践方法バージョン 5 にあるように「急性期でもできる限り早期から退院に関する希望を尋ねてみる」ことである。実践した看護師らは【従来の方法ではなく実践方法に基づき入院早期から希望を確認】したと述べていた。そのためには、B 看護師が実践していたように、対象者の状況を細かく観察し、タイミングを見計らうことが求められると考えた。また、看護実践方法バージョン 3 及び 4 にあるように、新規入職者などの場合はあらかじめスーパーヴィジョンを準備し、タイミングを検討することも有用であると考えられた。

最後に、研究 3 で看護を実践した看護師は【患者さんの抱く退院後の生活に関連した希望を見通す】と述べていた。コアメンバーは【受持ち患者さんの希望を反映した退院支援の連携】を述べていた。2014 年 4 月 1 日以降、全ての医療保護入院患者には精神保健福祉士等

を退院後生活環境相談員として選任しなければならないと規定された。規定の背景には、退院調整を円滑に進めることで、患者にできる限り早く地域生活に戻ってもらいたい意図があると思われた。専任の相談員がいる一方で、看護師が退院後の生活を支援することも欠かせない。看護師は退院する先を調整する退院調整とは異なる意図で、どのように暮らしたいかという“退院後の生活”について述べていると考えられた。看護師らは、患者がどのような退院先に退院するのかではなく、退院後の生活で実現したい希望について、その実現を支援する重要性を認識したと考えられた。90 日以内での退院が見通される精神科スーパー救急病棟では、入院早期から、退院後どのように生活したいかという希望を患者に確認し、その希望を実現できるように支援することが患者の希望を反映した看護実践のあり方であると考えた。

V. 今後の課題

1. 精神科スーパー救急病棟に入院中の対象者からの希望把握

本研究では精神科スーパー救急病棟に入院し、急性期の精神症状を呈し、思考や意識に一時的な障害を生じている患者の希望をどのタイミングで把握すべきか明確になっていない。研究 3 の看護実践方法バージョン 5 では、④急性期でもできる限り早期から退院に関する希望を尋ねてみることを挙げているが、明確な時期は見出しきれていない。研究 1 の対象となった看護師らの述べた【患者の病状や疎通性をアセスメントして隔離中などできるだけ早期に希望を尋ねられるかの見極め】からは、看護師のアセスメントの必要性を考察できた。精神科スーパー救急病棟で対象者の希望を反映した看護をさらに発展させるためには、看護師のアセスメント要素として、入院後ある程度病状が落ち着いた対象者に、どのような時期から自分の希望を表現できたと思われるかや、いつごろから自分の希望を看護師に確認して欲しかったかを聞き取る必要がある。

2. 患者の希望を反映した看護を実践するためのチーム作り

研究 1 で看護師らは【チームで患者の希望を尋ね実現するための風土醸成の必要性】を述べていた。しかし、研究 3 では、コアメンバーが考案した看護実践方法を看護師が実践することに留まり、チーム全体では検討していない。そのため、十分にチームで看護実践できたとは言い難い。コアメンバーが捉える看護実践上の課題は看護実践方法に反映されたものの、他の看護師がどのような課題を捉えていたかは不明である。今後は、チーム全体での検討や、教育的アプローチを活用して、時間をかけながら患者の希望を反映した看護を実践するためのチームを形成することが求められると考えた。

引用文献

- 川田陽子, 田嶋長子. (2018). 患者の希望を引き出す精神科看護師の援助実践の構造と影響要因. 大阪府立大学看護学雑誌, 24(1), 39-48.
- 松下年子. (2019). 精神科スーパー救急病棟の患者の入院体験-インタビュー調査を通じて-. アディクション看護, 16(1), 33-45.

- 中沢正夫. (2005). 精神科看護のための 50 か条(初版) (pp. 67-71). 萌文社.
- Russinova.Z. (1999). Providers' Hope-inspiriog Competence as a Factor Optimizing Psychiatric Rehabilitation Outcomes. Journal of Rehabilitation, 16(4), 50-57.